慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大路の柳・堤の柳
Sub Title	
Author	川村, 晃生(Kawamura, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	1997
year	
Jtitle	三田國文 No.26 (1997. 9) ,p.1- 7
JaLC DOI	10.14991/002.19970900-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00296083-19970900-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大路の柳・堤の柳

川村 晃生

添えてきた。早く『万葉集』において、 古来柳は、古典文学の春景を形造って、多くの作品に彩りを

春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしそ思ふ

を見ており、また、という春気を強く感じさせる語が歌語として成立と、「春柳」という春気を強く感じさせる語が歌語として成立

梅の花咲きたる園の青柳を縵にしつつ遊び暮らさな

(巻五、八二五

らにといいであるでである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これでは、これである。これでは、

霜枯れの冬の柳は見る人の縵にすべく萌えにけるかも

浅緑そめかけたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも(巻十、一八四六)

柳の歌が存するのも、古代の人々が柳の芽ぶきに春のあふれるなどを初めとして、結句を「萌えにけるかも」と詠みおさめる(巻十、一八四七)

しかし柳がそうした早春の景観を形成したのは、いわば副次生命力を感じたからに相違あるまい。

部猛氏(『万葉びとの生活』、東京堂出版、一九九五)は、平城は、古代文学のいくつかの断片から知られるところである。阿れてきたのである。たとえば柳が街路樹としての用を果したの的な産物であった。柳は本来それとは別の目的をもって植栽さ

東の市の植木の木垂るまで逢はず久しみうべ恋ひにけり

京の条坊に柳を街路樹として植えたことを述べられ、『万葉集』

られていた街路樹を柳と考えられ、上句はその柳が垂れ、地面の一首に詠まれる平城京東市(左京八坊三条)のあたりに植えの一首に詠まれる平城京東市(左京八坊三条)のあたりに植え

提出されてもおり(『萬葉集全注』該当歌注に拠る)、確定は難ともこれを杏(からもも)とする説が、古く関野貞氏によってに届くほどになっている様子を詠んだものとされている。もっ

春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほしいが、しかし平城京に柳が植えられていたことは、

歌によっても明らかである。都の大路には柳が植栽され、都城という、「二日に、柳黛を攀ぢて京師を思ふ歌一首」と題する(巻十九、四一四二)

れた。たとえば催馬楽の「大路」には、さらにこの街路樹としての柳は、平安京遷都以後も受け継がの象徴的な存在として人々に認識されていたのであった。

と歌われ、また「浅緑」にも、なひを見れば、今さかりなりや(今さかりなりや)今さかりなりや(青柳が花や)青柳が花や(青柳が花)

光る 新京朱雀のしだり柳 ~ (以下略) 浅緑 濃い縹 染めかけたりとも 見るまでに 玉光る 下

に収める、樹として植栽し、街並を形成していたらしい。従って『古今集』樹として植栽し、街並を形成していたらしい。従って『古今集』とも歌われている。平安京も朱雀大路を中心として、柳を街路

見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春のにしきなりける

凡神泉苑廻地十町内、今・京職栽が柳・町別七株えてよかろう。『延喜式』の(巻四十二、左右京職)には、という素性法師詠は、そうした平安京の春景を詠んだものと考

が植えられ、またとあって、神泉苑の周囲にも約一五メートルに一本の割合で柳

凡道路辺樹、當司當家栽」之

ては、石田幹之助氏の卓論「長安の春」に、中国では春秋、戦を植えたのに倣ったものかと推測されている。長安の柳についたのかは明らかでない。阿部氏は唐の長安の都で、槐と柳(楊)ところで平城京や平安京の街路樹として、なぜ柳が選定されに面した役所や家々の費用負担で植えられたものと思われる。とあることからすれば、阿部氏も指摘される如く、植樹は道路

うべきであろう。 国以降、街路樹を植えることが発達し、槐樹と楊柳を本格とし国以降、街路樹を植えることが発達し、槐樹と楊柳を本格とし国以降、街路樹を植えることが発達し、槐樹と楊柳を本格とし国以降、街路樹を植えることが発達し、槐樹と楊柳を本格とし国以降、街路樹を植えることが発達し、槐樹と楊柳を本格とし

人源兼澄の家集『兼澄集』(六六)には、それは都鄙を結ぶ街道筋にも植えられたらしい。平安中期の歌一方柳は、都城の街路樹として植えられただけではなかった。

たのである。こうした街道筋に植えられた柳は、『大弐高遠集』の末に、夫が妻を追いかけて、柳の木の下で妻に歌を詠みかけ(又は「京なる人」)の誤写でもあろうか。ともかく夫婦喧嘩(又は「京なる人」の誤写でもあろうか。ともかく夫婦喧嘩という一首が見える。詞書の「なる人」は、春秋会『源兼澄集という一首が見える。詞書の「なる人」は、春秋会『源兼澄集者がかく来るにつけても青柳の糸はとくべくたえじとぞ思ふ

春部に、「行路柳」題が設けられ、品ながら、宝治二年(一二四八)に詠進された「宝治百首」のという一首(これは大路の柳と見るべきか)や、また後代の作うちなびき春立ちにけり青柳のかげふむ道に人のやすらふ柳ある所

中の彰子入内屛風和歌、

りにしかば、追ひてまかるに柳の本にて

若狭の国に侍りし時、

なる人の来たりしかば逃げて京へ上

道の辺に染めてみだるる青柳のかみなび山を今日や越えなん

うちなびき行手のかたやをしふらん道のさかひの青柳の糸

(二四八、基家

都鄙を問わず、 などの歌が詠まれていることによっても明らかであろう。柳は 道沿いに植えられて街路樹としての役を担った 寂西)

こかしこに、

詠んでいる。

或いはまた藤原定家も、

その日記

『明月記』のこ

を待つ用意はしたものの、誰も訪れてくれない恨みの気持ちを りに柳が植えられていたのであろう。柳の下枝を切り払って客

垂柳漸緑

て建築、構成されたようだ。鑑賞用に植えられた庭の柳もその られたらしい。道路に面した邸や役所も、 さて柳は、街路樹以外の目的においても、様々な場所で植え 多くの柳の木を擁し

つである。たとえば『忠見集』には、

の一首が存し、 わが宿の柳の糸も春来ればみどりの糸になりにけるかな 月次屛風の絵柄に、 詞書に「三月、柳おほかる人の家」と見えてい 「柳おほかる人の家」が描かれていた

見にと来る人だにもなし我が宿のはひりの柳下払へども

ある。

と記されており、

清涼殿の庭の柳の痕跡が認められもするので

ことを証していよう。また『和泉式部集』は、冒頭の百首歌の

すでに柳が人家に多く植栽されていた

ことは、平安時代初期、

邸の入口、或いは門から家までの間を意味する語だが、その辺 という一首を収め、「はひりの柳」を詠んでいる。「はひり」は、

『万葉集』に

(寛喜二年〈一二三〇〉閏正月二十四日)

たとえば

雨中対応柳 巻 南面簾 只対:紅梅翠柳: 悲残涯 (同年二月二十五日 (寛喜三年二月二十一日)

等の記事を書き留め、庭の柳を注視してその柳によって自らの

また同じ庭で言えば、柳は禁中の庭にも植えられていた。

心を慰藉したようだ。

春来れば玉の砌を払ひけり柳の糸も伴のみやつこ (長秋詠藻、二一一)

びしとなげく女房)には、 禁中の庭の柳が確認される。『栄花物語』(巻三十三、きるはわ 垂」の歌題のもとに詠まれた藤原俊成の作だが、これによって

させ給へりけるが、生ひ出でたりけるを聞き給ひて、 へりければ、枝はまことにてありければ、清涼殿の壺に植へ 女院の御堂行はせ給けるに、柳の作りたるを内に参らさせ給

(以下略

右の和泉式部の さて柳は、庭内の中でもとくに門の辺りに植えられたようだ。 「はひりの柳」もその一つであろうが、古く

の一首は、保元四年(一一五九)三月内裏歌会での、「禁庭柳

- 3 -

我が門の五本柳いつもいつも母が恋すす業りましつつも

の一首が見られ、門前の柳が詠まれている。「我が門の五本柳 (巻二十、四三八六) さらにまた柳は、

語に「門柳」という語があり、 は、この歌から派生して後代にいくつか詠まれるに至るが、漢 たとえば白居易の「東南行」

春色辞 門柳

(白氏文集、巻十六、○九○八) に

などと詠まれていることからすれば、街路樹と同様に門前の柳 秋声到二井梧

境界を形成する場所に植えられることが多かったらしい。家屋 は中国の様式や文学からの影響と考えてもよかろうか。 ところでこの門に植えられた柳から推知されるように、 柳は

いる。たとえば 山里の家ゐは霞こめたれどかきねの柳すゑ葉とに見ゆ

敷の周囲では、門の他に垣根としても、柳はその役割を担って

(拾遺集、雑春、一○三一、弓削嘉言

らし給ひて~

春雨の降りそめしよりいつしかと垣根の柳色づきにけり

などに見える「垣根の柳」がそれをよく示すが、或いはこれも か。「牆柳」は、たとえば『和漢朗詠集』(柳、一〇二)に、 また漢語「牆柳」に基づいての、中国様式からの影響であろう (永承六年(一〇五一)六条斎院歌合、二六、讃岐)

牆柳誰家曝 | 麴塵

林鶯何処吟。筝柱

の詩人や歌人たちに親しまれた。 という白居易の「天宮閣早春」の一節が撰入され、早くに我国 右の弓削嘉言詠なども、この

> 詩句の影響下に成ったものであろう。 家屋敷の境界にだけ植えられたのではなか

小山田の岸の柳もうちはへてひくしめなはにかげぞあらそふ (久安百首、七一一、実清)

(隆祐集、八四、田辺柳)

しづのめが小田の堤にさす柳しげくも今年はえにけるかな

の旧潟頭村で、田を細分化する際、仮畦を作らずに柳の若枝を に刻まれた歴史』、岩波書店、一九六七)が、江戸時代に越後 形造っていたらしい。そしてそのことは、古島敏雄氏(『土地 などの例からすれば、柳は田のきわにも植えられ、その境界を

の若枝を挿したのは、おそらく『万葉集』(巻十三、三三二四) 挿して区分したことを報告していることからも首肯される。柳 の長歌の一節に、 〜み雪降る 冬の朝は さし柳 根張り梓を 大御手に 取

ていたからであろう。柳を挿木にする歌は、右の「久安百首」 の実清詠にも見られるが、他にも『万葉集』に重ねて、 と詠まれる如く、柳が古くから挿木で根づきやすいことを知

小山田の池の堤にさす柳なりもならずも汝と二人はも (巻十四、三四九二)

柳こそ伐れば生えすれ世の人の恋に死なむをいかにせよとて

と見えている。また柳は、同じく『万葉集』に、

とも詠まれる如く、根張りや芽ぶきにおいて、きわめて生長力 (巻十四、三四九一)

4

の強い木であった。

そして田ばかりではなかった。柳が野の境界に植えられて実

岡かけてしむる野の境にたてる玉のを柳」(西行法師家集、三 西行」、平成七年六月和歌文学会例会)。 西行の「山がつのかた 絵図」を用いて、久保田淳氏が指摘されている。(「空仁・惟方・ 用性を有していたことを、『留守家文書』の「岩城分七町荒野

の吾跡川

*

それを詠んだ一首である。

葉集』の次の一首も相応に興味深い問題を孕んでいる。 さてこうした柳の生活史上の意義に照らし合わせる時、 万

.のまに雪は降りつつしかすがにこの川柳は萌えにけるかも (巻十、一八四八)

首で、ここには川柳の語が見える。これはまた、並んで配

列される、 山のまの雪は消ざるをみなぎらふ川のそひには萌えにけるか (巻十、一八四九)

という一首の「川のそひ」の柳や が)、『日本書紀』中の、 (歌中に柳は省略されている

いであろう。 という一首の「川ぞひ柳」と同一のものと考えてさしつかえな 『万葉集』の中には、 いなむしろ川ぞひ柳水行けばなびきおきたちその根は失せず 川の堤や岸に植えられた柳と考えてよく、じじつ 頭宗天皇紀

あちらこちらの河岸の柳がいくつか詠ま

ている。 たとえば、

(未詳、近江国安曇川に関わるか)の他、佐保川

あられ降り遠江の吾跡川柳刈れどもまたも生ふといふ吾跡川

良市、 の例として挙げられる。そして川ばかりではなかった。既掲の 四三三)、六田川(奈良県吉野町、一七二三)などがそ

の植栽は、実は法律の定めるところでもあった。『標注令義解 柳は植えられたのであった。そしてこうした川や池の堤への柳 三四九二番歌「小山田の池の堤」に見られる如く、池の堤にも

校本』(巻七 営繕令第二十)には、 凡堤内外并堤上、多植二榆柳雑樹・充二堰用

も少なからず登場する。 に植栽されたのであった。 れているのである。柳は、いわば法制下において、池や川の堤 とあって、『養老令』に、堤には楡や柳を植えるべき旨が記さ さてこうした川や池の堤の柳は、平安時代以後の作品の中に いくつかの例を挙げるならば、

という好忠詠中の竜田川ぞいの柳や、 夏衣たつた川原の柳かげ涼みに来つゝならす頃かな

ば『後拾遺集』(夏、二二〇)の、

道のべの賀茂の川原の柳かげ春のゆききにたれならすらん 〔夫木抄、春三、八三二、従二位頼氏卿〕

などの賀茂川原の柳や、 広沢の池の堤の柳かげみどりも深く春雨ぞ降

風雅集、春中、 前大納言為家

など、広沢の池の堤の柳も詠まれている。また『散木奇歌集

5

の詞書に 「田上にて川のほとりに立ちなみたる柳 \mathcal{O}

の風景が一般化するにつれて歌題化を促し、『伊勢大輔集』(一 木」とあるのもその一例であろう。一方こうした岸の柳は、 そ

仲集』(六五)には、宇治殿での「岸柳垂糸」題が存する。 一九)には東三条第の池の柳を詠んだ「岸柳」が見え、『橘為 ま

とほぼ時を接するのだが は奇しくも好忠の竜田川原の柳詠が『後拾遺集』に入集するの 設題されてもいる。従っておおむね後拾遺期頃から、 た『津守国基集』(八)には (一〇六七) 三月十五日「備中守定綱歌合」では、「岸柳」が 「岸柳臨水」 「岸柳」題が固定化し始めると 題が見え、 治暦三年 ---それ

をよく水で洗ひ、 カハヤナギの類の、 かであろう。柳田国男が『山の人生』の中で、「川の岸にある る」と述べている如く、柳は髯根の発達した樹木で、護岸には さて以上のような岸や堤の柳は、既述の如き根張りの良さか それが護岸のために植えられたのであったことは明ら それを寄せ集めて蒲団の代りにしたさうであ 髯根の極めて多い樹木を抜いて来て、其根

見てよいであろう。

に江戸時代の博物学書 記したものとして、江戸時代の農学書『百姓伝記』がある。 ところで柳の護岸の用途について、それを具体的かつ詳 前者の方がより詳密である。 『成形図説』にもその旨は記されてい そこでいま、『百姓伝記』に 細 他 る

きわめて適していたのであった。

拠ってこれを引けば、 水をふせぐ川よけには、 同書の巻七 堤に柳を植るにましたる事なし。 (防水集・川除堤に柳・竹を 然

> 堤腹に、 をつゝみ、堤腹くづれず。また新堤をつくに、そだに切まぜ、 せいの延上らぬ柳を水岸にさせば、順々に根はへまとい、土 をあらはず。かり取に伝受あるべし。丸葉柳・楊柳・こぶ を出さする。 くさき、 ども柳に色々有故、兼て見習、 かにして、大水の時、堤腹へ柳の枝ひたとねるによりて、土 とたちて居るによりて、水あたりつよくして、 堤腹の土を洗ふ事多し。年々かりては、枝ほそくやわ 木たけの延ぬ、葉のほそき柳あ ひしと植置。秋の末に枝を中かりにして、 年々からざれば、木ふとり、大水の時、 覚べし。 川柳と云て、 ń 堤を水つきより 却て水さか わかぼえ しやん 枝の多

水漬(通常水位)より堤腹 えるべきではない旨が述べられるのだが、これに拠れば柳は、 と述べられている。以下に挿木の方法や大木になる柳などは (水面から堤頂の間、 川側の法言 面

よし。(以下略 堤につき込ば、

わかぼゑ出る。極月より二月までさしたるが

洗はず」という効用を狙ったものであろう。『夫木抄』(春三、 を示しているものと見られる。そしてそれは、右の『百姓伝記 現などは、 植えるという)、書紀の「水行けばなびきおきたち」という表 わち堤の川側の斜面に植えられたわけで(柳は無酸素に耐 に植えられており、堤の上に植えられたのではなかった。 に言う如く、「大水の時堤腹へ柳の枝ひたとねるによりて土を 水中や土中深くに根を伸ばせないため、水漬きより上に 柳の枝葉が水面に漬かるように植えられていたこと えら

七二、光後朝臣) 瀬を早み水かさまされば玉川の川ぞひ柳枝ぞ流るる

の一首は、 『風雅集』(春中、一〇〇、法印定円)の、 まさにその光景を写し取ったものであろうし、 また

植えられた柳を指しているものと思われる。 吉野川いは浪あらふふし柳はやくぞ春の色は見えける 一首中に見られる「ふし柳」は、堤腹に川に向けて横ざまに

二六二)に入集する西行法師 ところで柳の歌と言えば、誰しもすぐに『新古今集』(夏、

の一首を想起しよう。この柳は、 道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ のちに、 謡曲

めるのだが、しかしこの西行の歌においても、 され、「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」の一句を芭蕉に詠まし 由して、 は川岸の一本の柳の老大木が示され、また現今芦野温 の大木を想像すべきではないのではあるまいか。「遊行柳」で (栃木県那須町芦野)参道入口の田園地帯に、二本の柳の大木 蘆野の里の田の畔に残る柳として『奥の細道』に伝承 やはり一本の柳 「遊行柳」を経 原神社

柳も、 実情に合うように思われる。 が遊行柳として伝承されるが、いかがなものであろうか。この 髙木のカワヤナギなどを考えればよかろうか。 とも低木では樹蔭納涼にふさわしくないというのであれば、 は小川のふちなどに生えるという (原色牧野植物大図鑑)。もっ と植えられた、護岸の柳並木の中の一本で、低木と考えた方が 道の辺の清水が増水時に道の土をそぎ落とさないように 実際低木種のイヌコリヤナギなど 亜高木のもので

形造っていたと思われる。その顕著な例としては、歌集『一握

そしてこうした河岸の柳は、

近代に入ってもなおその風景を

幹を途中で伐れば護岸の役に立つとされる。

それはつい最近まで、全国各地に共通の景観として見られたも 地を流れる北上川の岸辺の柳が描き出されているが、おそらく の砂』(明治四三年)に初出する石川啄木の代表的な望郷歌) の一首を挙げれば事足りようか。ここには岩手県玉山村渋民の やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに

いずれにしても私たちが思い描く古典文学の自然風 景の 中に

のであったのだろう。しかしそれについては、別途に考察を加

えねばならない。

考えてよさそうである。柳は日常の風景の中に、 の存在を誇り、また先人たちの生活の用に立っていたのであった。 今以上に想像を越えてあちらこちらに柳が点在していたと 馴染み深くそ

-7-

伊藤貞彦氏の御教示を得た。感

かわむら

てるお)

謝申し上げる。

(付記) 本稿をなすにあたり、